

# 『雲隠六帖』諸本共通祖型に迫る

——新出・広島大学蔵本の位置——

小 川 陽 子

## はじめに

『雲隠六帖』の現存伝本は、一類本と二類本の二種に大別される。二種の関係については、一類本の先行<sup>①</sup>、二類本の先行<sup>②</sup>、共通祖型からの派生<sup>③</sup>と、さまざまな説が提唱されてきた。これに対し稿者は、物語本文と識語を検討し、「物語本文・識語の共通祖形からそれぞれに展開した結果、現在のような二種類の本文・識語にいたったのであり、その痕跡をとどめるのが一類本の尚侍詠と二類本の識語であると考えたい」と述べ、共通祖型からの派生という山岸徳平・今井源衛両氏の説を支持してきた。とはいえ実際のところ共通祖型の存在を裏付ける伝本は見出だせず、『雲隠六帖』の諸本関係をめぐる議論の進展は難しいと言わざるを得ない状況にあった。

ところがこのたび、この問題を考究する上で大きな手掛かりとなる写本が出現したのである。広島大学に収蔵したこの新出写本（以

下、広大本と呼ぶ）は、寛文九年の本奥書と、明治三十二年、同三十五年の藤原四郎兵衛による奥書とを有し、①『雲隠六帖』伝本二種の間中間的な様相を示す、②他作品二種と合写されている、という二つの特徴を持つ。広大本は、『雲隠六帖』の生成と伝流を考える上できわめて重要な一本と言える。

本稿は、この新出伝本について報告と考察を行うものである。広大本は、二種の本文が接触した結果としての混態本文とは見なしがたく、共通祖型の様相に迫るための情報を種々に提供してくれる伝本である。誤写誤脱が多く、本文としては瑕疵が目立つのが惜しまれるが、具体的に本文を検討し、『雲隠六帖』共通祖型の一端を確認してみたい。

## 一 広大本の構成と伝来

まず広大本の書誌を記す。

仮綴じの一冊本、表紙なし。二七・三×一八・五cm。墨付き三十五丁。一面十一行。蔵書印はないが、後述するとおり複数の奥書があり、伝来の一端を知りうる。三作品を合写しており、冒頭に「達磨記」、三十四丁裏に「あかはたか」という内題を有する。これら二作品の中間に書写された『雲隠六帖』には作品名を示す内題が存しないが、六巻の物語のうち雲隠巻および法の師巻を除く四巻については、各巻のはじめに「すもり」「僧人（＝桜人）」「ひはりこ」「八橋」と巻名が付されている。なお、雲隠・法の師両巻は、巻名に相当する箇所が一行分空いている。

広大本の構成を簡単に示すと、以下ようになる。

I 達磨記 一丁表～十丁裏

II 雲隠六帖 十丁裏～三十四丁表

III あかはたか 三十四丁裏～三十五丁裏

右のうち、IIの末尾には、上部に、

寛文九年

己酉

林鐘廿二日

下部に、

寛文九年方明治三十二歳マテ凡

二百三十一年トナリ旧六月十五日ニ

コレヲヨミ藤原四郎兵衛行年八十才

ニテ今日コニ書ヲキコノタルマキ<sup>①</sup>

大切ニ用ユヘシコノ世又モトメルヲ

ナラス

と、異なる時期の書写・所持に関わる記載があり、さらにIIIの末尾すなわち当該本の末尾には、

右たるまをこ覽してこゝろに<sup>②</sup>

みかきしるへし

明治三十五歳 藤原四郎兵衛

旧七月十八日ヨリ 行年八十三才

二十日マテ見ヲワリ コレヲヨミ

との奥書がある。まずII末尾上部の記述は、寛文九（一六六九）年六月二十二日ということで、右三種のうち最も古い年次を示すものである。書かれた位置からして『雲隠六帖』の書写にかかわる記述と見てよい。この寛文九年時点でIの「達磨記」とすでに合写されていたか否かは不明である。親本は『雲隠六帖』単体で寛文九年奥書を有していた可能性もあろう。次にII末尾下部は、冒頭に「寛文九年方」とあり、上部の寛文九年奥書を承けた記述となっている。明治三十二（一八九九）年六月十五日に藤原四郎兵衛なる人物によって記されたものである。最後にIII末尾の奥書は、II下部と同じ藤原四郎兵衛が明治三十五（一九〇二）年七月十八日から二十日にかけてこの本を読んだことを記すものとなっている。



(広大本最終丁)



(広大本第1丁)



(広大本『雲隠六帖』末尾)

墨の状態から見ると、三作品の本文および寛文九年奥書は同じと  
きに書かれたもので、その後、明治三十二年、同三十五年の二度に  
わたって藤原四郎兵衛が読後の感懷を書き添えたものと思しい。そ  
のことは、波線部①「コノタルマキ（Ⅱこの達磨記）」、波線部②「た  
るま（Ⅱ達磨）」との記載からも裏付けられる。藤原四郎兵衛の手  
にした一冊すなわち広大本は、すでに『達磨記』と他二作がともに  
合写されていたのである。藤原四郎兵衛はそれをどこからか入手し  
た後、大切に所持したことが、Ⅱの末尾下部およびⅢの末尾の記述  
からうかがわれる。

なお、藤原四郎兵衛については、管見の範囲では、大高洋司氏蔵  
『英草紙』<sup>⑤</sup>第三冊の奥書に「明治十八歳 藤原四郎兵衛／九月十  
日マテ三遍 年六十六才」とあり、その名が見える。明治十八  
（一八八五）年に六十六歳という年齢は広大本ⅡⅢの年齢表記と矛  
盾せず、同一人物と見てよいだろう。しかし、それ以上の手掛かり  
はなく、どのような人物で、いかなる事情により広大本を入手した  
ものかは不明である。なお探索を続けたい。

## 二 『雲隠六帖』諸本における広大本の位置（一）

### ― 伝本二種の中間的本文 ―

はじめに述べたとおり、従来知られていた『雲隠六帖』の現存伝  
本は、その本文のありようから二種に大別される。これに対し広大

本は、伝本二種の中間的な本文を有しており、きわめて重要な一本  
と考えられる。以下、具体的に本文を見ていきたい。広大本、一類  
本、二類本の順に本文を示す（以下、同じ）。

#### 例一

君かあたりさらぬ鏡のかけそいてくもりなき世ヲAみるそ  
うれしき

とのたまふヲいまた世におはしける物と御袖ヲひかへんとする  
におとろきていかひなし夢のうちにもことはヲかはさす成に  
し事あかすかなしくまことにいはけなくて別奉りしヲおもへは  
さもいつくしうらうたけなりし面かけ忘れかたくB夢としりせ  
はどうちすんし給いて名残かなしくおほへて御ゆつりの二条の  
院にてみはつかうせさせ給はんとおほすさかの院にてみす経な  
と有へし御門も御ねんすなどしたまいて哀におほし出てふしつ  
ほの后かの面かけにかよい給いけりと此比も思ひわたりしかと  
もCふんみやうなりしか夢のうちなからいとよくこそおほへ給  
へ（桜人・五九六頁）

#### 【二類本】

君かあたりさらぬか、みのかけそひてくもりなき世をAな  
をてらすかな

との給ふを世におはしけるものと御袖をとり給はんとけしきつ  
くろふとておとろき給ふにいとかなひなしせてひとことをかは

さずなりけることのくやしきあかずかなしうまことにいはげ  
なくてわかれたてまつりしをだに思ひかへせばさもうつくしう  
らうたげなりし御おもかけわすがたくBまなくもちるかとう  
ちずじ給ひて名こりかなしくおほしてゆづり給ひし二条院にて  
御八かうおこなはせ給はんとおぼす嵯峨院にて御誦經あるべし  
みかども御ねんすなどさま／＼ものし給ひてあはれにおほし出  
つ、藤つほの御おもかけのにかよひ給ふけりとこのころもおも  
ひわたり給ひしも年へにければCをほろなりしが夢のうちなが  
らいとよくおほえ給へ

## 【二類本】

君かあたりさらぬ鏡の影そひてくもりなき世をA見るかう  
れしき

との給ふをいまた世におはしけるものと御袖をひかんとすると  
おもひてさめたまひければいとかひなく夢のうちに言葉をか  
はさすなりにし事あかす口おしくまことにいはけなくてわかれ  
たてまつりしを夢にもさもうつくしうらうたげなりしおもかけ  
わすれかたくB夢としりせはと返／＼なこりも恋しうまか／＼  
しけれどもふちつほのきさきかの御面影に通ひ給ひけりととし  
比もおもひわたりしかともCふんみやうならさりしか夢のうち  
なからいとよくこそおほへ給へ

桜人巻頭、亡き紫の上に思いを馳せる勾宮の夢に、当の紫の上が

現れ、「君があたり」歌を詠みかける。波線部A、歌の第五句は、  
広大本と二類本がほぼ同じであるのに対し、一類本に異同が見える。  
その夢を承けた勾宮の心情を表す引き歌も、波線部Bのように、広  
大本・二類本が「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覺  
めざらましを」（『古今集』巻十二・恋歌一・五五二、小野小町）を  
引き、夢から覚めたことを悔やむのに対し、一類本は「ぬき乱る人  
こそあるらし白玉の間なくも散るか袖のせばきに」（『古今集』巻  
十七・雑歌上・九二三、業平朝臣）を引き、白玉ならぬ我が涙の止  
まらぬ様を口ずさむという相違がある。引用末尾の波線部Cも、「分  
明」でなかったとする広大本・二類本と、「おぼろ」であったとす  
る一類本、という本文状況にある。すなわち波線部はいずれも広大  
本と二類本が近く、一類本と対立する本文を有していることが確認  
できる。一方、破線部では、広大本・一類本が紫の上ゆかりの二条  
院ならびに光源氏ゆかりの嵯峨院における追善を語るのに対し、二  
類本にはそれらの供養がまったく見受けられない。このような短い  
一挿話ですら、広大本には、一類本に近い部分（＝破線部）と二類  
本に近い部分（＝波線部）が共存しているのである。いずれの異同  
についても、それぞれに物語世界を展開するものであり、どうい  
った本文が当初の姿であったのか、この場面のみでは判断しがたい。

このように広大本には、大筋において一類本に近く、細かな点で  
二類本に近いという場面がある一方で、まったく異なる様相を見せ

る場面もある。

例二

世をそむき給いて年月何ヲ心かけ給いけん今こん生ヲはなれて後<sup>に</sup>また御跡ヲは何かと、めたまはんとうたて有御ことは也その末の露消うせて後に何もの跡ヲ見せめやた、そのまゝ、御いきたへは「地水火風空」とりはなして何ものか残りてとふらは、うせ給へきか只今なりとも心ヲをおこしよく／＼御むねヲおさめ給へと申給へは（雲隱・五五八頁）

【一類本】

世をそむき給ふてとし月何をか御こゝろにはかけおほしにたるこの世を立はなれてはと、め給はんものとして何か待へるいとうたてある御こと葉にも聞え給ふものかなた、その御まゝに「いつ、の物」とりはなちてなかぞらにかへりすむほうかい一如の御さとりしばしも御こゝろにのこる事おはしまさじと申給ふ

【二類本】

よをそむき給ひてとし月何をかこゝろかけたまひけんいまこのしやうをはなれたまひてのちに又御あとをは何とと、めたまはんというたてある御言葉なりそのすへの露きえうせてののち何と跡を見せめや只其ことく御いきたえは「地水火風空」とりたして何ものかのこりてとふらは、うけ給ふへきか返々た、今な

りとも御心をおこしたまは、おもひをさめたまへと申給へは

雲隱卷、死期を悟った朱雀院が光源氏を残して逝くことを案じたのに対し、光源氏がたしなめた言葉である。二重傍線部「とどめたまはん」、「うたてある御言葉」のように、ところどころ諸本共通する文言もあるものの、波線部は基本的に広大本・二類本が共通し、一類本と対立する本文となっている。ここで一類本が「五つのもの」と述べ、広大本・二類本がさらに具体的に「地水火風空」と言及する五大は、雲隱卷末の描写ともかかわってくる。雲隱卷末は、一類本が、

吹風のもとたまらぬあまつそらにしばしは雲のたゝすまひして

という光源氏の詠歌をもって閉じるのに対し、広大本・二類本は、光源氏詠を、

桜井に心得あらは秋風のめにもみへこぬ跡とこたへよ（広大本）  
わくらはにとふ人あらは吹風の目にも見えこぬあととこたへよ

（二類本）

とし、さらに続けて、光源氏の存在を「萬の人ヲ佛法にたよらしめきゑんヲ結びて又ゑとの衆生を道ひかんのちかい」によるもの（本文は広大本による）と位置付けた上で、約一丁にわたって仏法を説くという大きな相違がある。紙幅の都合上、本文全体の引用は省略するが、ここで仏法を説くにあたり、「たゝ四方の嵐の大空ヲ吹フ



聞ても我身のはしめおはりヲ思ひしり給ふに我もなく又たもなしたとへは「**地水火風空**」あわすれば我身と思ひ又はなすれば火と水と見るかことし」（広大本による）と、ふたたび「**地水火風空**」を取り上げるのである。すなわち、広大本・二類本は五大に繰り返し着目しながら仏法を語らんとする本文であり、この点において一類本と大きく対立している。

**例二** にせよ雲隠巻末にせよ、広大本・二類本と一類本のいずれかが誤りというわけではなく、志向するところの相違が表れていると解せよう。

このように広大本には、一類本に近い箇所と二類本に近い箇所のいずれもが含まれているのである。この二例が特異なわけではなく、同様の箇所はいくつも見出すことができる。広大本が伝本二種の間隔的な本文を持つと述べた所以である。

続いて和歌に目を向けてみたい。上述したように、**例一** の和歌では広大本・一類本・二類本が基本的に同一の歌句を有しつつも第五句は一類本のみ異なっており、雲隠巻末の光源氏詠では広大本・二類本と一類本でまったく異なる歌となっている。このような和歌のありようは作品全体に及んでおり、広大本は和歌三十六首のうち最終詠を除く三十五首が、小異はあるものの、基本的に二類本と共通する。なお、最終詠については他の和歌と事情が異なると考えられるため、次節で改めて取り上げる。

たとえば、物語第一・二首の光源氏と朱雀院の贈答歌（雲隠・

五四八頁）は、

夢の世に幻の身**の**生れ来てうつゝ、かはにて過しはてめや  
紫のうへおく露におとろきてはしめて夢の世をやしるらん

【一類本】

まほろしの身をしるからのこゝろもて夢てふ世をはすくしはてめや

夢の世とおもひそむるやむらさきの根さへかれ野は風もたまらず

【二類本】

夢の世にまほろしの身**に**生れきてうつゝ、かはにてすくしはてめや

むらさきのうへおく露におとろきてはしめて夢の世をやしるらん

とあり、広大本と二類本は、第一首第二句末尾の助詞「の」「に」の異同はあるものの、同一の和歌と見てよい。一方、一類本は、傍線部「幻の身」「過ぐしはてめや」（第一首）、「夢の世」「紫」（第二首）という広大本・二類本に共通する語を含みつつも、大きく異なる贈答歌となっている。一類本は、そもそも和歌が二十九首と広大本・二類本より少なく、かつ、広大本・二類本とほぼ同一の歌と見なせるものは十一首に過ぎない。広大本は、物語第二十四首（法の師・六二二頁）、

子ヲおもふ泪の川のはやきせにおくる、君も我もうきたる

【二類本】

おちたざるなみたの川のはやき瀬にをくれて今そ我はうきたる

【二類本】

子をおもふ涙の川のはやきせにしらみとなる君かことの葉のように、上の句が二類本、下の句が一類本に近い例もないわけではないが、基本的に二類本と共通し、一類本と対立している。

ごく一部を挙げたに過ぎないが、広大本が一類本・二類本の中間的な本文を有しつつ、和歌においては二類本とほぼ共通することを確認した。とすると、一類本・二類本という二種の伝本が接触した結果として生じた混態本文が広大本の類である可能性がまずは想起されよう。この点を次節で確認したい。

### 三 『雲隠六帖』諸本における広大本の位置 (二)

#### ― 共通祖型から一類本へ ―

注目したいのは、一類本の誤脱である。

例三

雪いとうふりしに左衛門の守時しけか事ヲおと、の詠し給いしぞ

をしなへてつもるみ雪のなとされは我身ひとつに消わふるらん (雲雀子・六三八頁)

【一類本】

雪いたうふりしに左衛門督ときしけか事をおと、のえいし給いしぞかし

をしなへてつもるみゆきをなとされはわか身ひとつと聞わ

びぬらん

【二類本】

雪いたうふりしに左衛門守時重かみつからひとりにもつともる雪かなといへるをき、給ひてこおと、のえいし給ひしそかし

をしなへてつもるみゆきをなとされはわか身ひとつとき、

わふるらん

雲雀子巻、薫の子息である少将の君は、嵯峨野へ出かけ、かつてこの野で薫が小鷹狩りをしたことを回想する。「おしなべて」歌はその折の薫詠であるが、これは二類本によれば、左衛門督時重なる人物が今まさに降りしく雪と己の白髪を思い合わせて独りごちたのを承けた詠歌である。これに対し広大本・一類本は時重のことを詠んだというのであるが、時重は『源氏物語』『雲隠六帖』を通じて初出の人物であり、この本文では「おしなべて」歌で詠まれた内容との繋がりがわからない。拙稿で述べたように、ここは二類本が本来の形を留めているのであり、広大本・一類本は誤脱の生じた本文と見るべきであろう。この場合、広大本が、一類本・二類本のよくな二種の伝本に接し、それを混在させた本文であるならば、文意



の通らない一類本を採用するということは考えにくい。

同様に広大本と一類本が誤脱と思しき本文を共有している箇所について、広大本が疑義を呈している例も見受けられる。

#### 例四

内のみかとおほしまし これもふしん かはとみかと御心のはるゝよなくこひかなしませ給ひける（巢守・五八四頁）

#### 【一類本】

うちのみかとおほしましかばとみかときさき御心のはるゝよなく恋かなしませ給ふける

#### 【二類本】

うちの御門やう／＼おり位の御心ちかくなり給ひてもあはれ二の宮のおはせしかはと御門后御心のはるゝよなくそこひかなし  
み給ひける

巢守巻、二類本では、帝（＝匂宮）が讓位の気持ちを強くするにつけ、二の宮が存命であったならと、后とともに恋い悲しむ。これに対し一類本は、帝が存命であったならと帝じしんが恋い悲しむという本文であり、文脈が通らない。これも拙稿<sup>⑩</sup>で述べたとおり、一類本が二類本の傍線部を誤脱したと見るべきであろう。これに対し広大本は、一類本とはば同文であり、誤脱と思しき箇所<sup>⑪</sup>に四角囲みのように「これもふしん」（＝これも不審）という独自本文を有するのである。広大本の親本ないしそれ以前の段階で、誤脱本文に対

し、「この箇所も不審がある」という意の傍書がなされていたものが、転写の過程で傍書が本行化してしまったものと思しい<sup>⑫</sup>。この場合もやはり 例三 と同様、広大本が一類本・二類本のような二種の伝本を混在させたという性質の伝本であるならば、二類本の本文を採用するのが自然であろう。

以上のように広大本と一類本が比較的大きな誤脱を共有していることから、広大本が伝本二種の混態であるとは見なしたい。加えて、広大本と二類本とは右と同様のレベルでの誤脱共有と思しき箇所が見当たらない。このような誤脱のありようと、広大本が一類本・二類本の中間的な本文を有するというありようとを鑑みると、現存諸本の生成については、

- ・ 共通祖型から、広大本・一類本共通の祖本と、二類本が、それぞれに派生した。広大本は共通祖型の面影を色濃く残しており、一類本および二類本への派生段階で種々の改変がなされた。
- ・ 二類本から広大本のような本文がまず派生し、さらにそこから一類本が派生した。

という大きく二つの可能性が考えられよう。前者であっても、広大本の派生に際して一類本・二類本とは違った形で本文の改変がなされている可能性はあり、細かな点については今後なお検討が必要である。しかし、このように諸本関係を捉えるならば、少なくとも、広大本と二類本の本文が一致し、一類本のみ異同を有する箇所につ

いては、広大本・二類本の本文が古態を留めていると見てよいのではないだろうか。和歌については、前節で述べたように広大本・二類本ではほぼ共通しており、一類本が大きく改作したものと判断される<sup>13</sup>。

#### 四 『雲隠六帖』諸本における広大本の位置 (三)

##### — 広大本最末尾詠と「内侍の督の君」 —

諸本関係について、広大本の最末尾に付された和歌に着目し、さらに考えてみたい。行論の都合上、先に一類本・二類本の相互関係について論じた拙稿<sup>14</sup>と重なる記述があることを予めお断りしておく。

何にせんその八はしヲ求へき何れもひとつた、心也

いつくより生れをわしていつくに御かへり候へきとそれヲたにまつよく御らんしられ候は、やすく御さあるへし何れの宗も道はた、ひとつにて候くらき夜にも三千せかいヲみるはまなこにてはみす候た、今のくらしいにてまし、候とも此むねヲたに御心にかけてさせ給は、へちに一大事と申事有間布候しやくそんもまことの御さとりこそついにと、き候へとそ申上させ給けるとなん、

みなもとのすへもふみしる人なれはもとの道ヲも思ひこそ

やれ (八橋・六四三頁)

#### 【一類本】

なにせんにそのやつはしをもとむへきひとつの水はくもでなりとも

生れこしところはもとこれいつくよりぞかへりゆくべきみちはいつちなるべしやとうしなへる御こゝろをたつねみそなはさせ給はんにはた、こゝもとにおはしますものを身をはなれてとをくなもとめ給ひそ (中略) た、その御くらゐのうへにぞ御こゝろのうちにかけてさとりえ給はんこそとそうし申給ふけりとなん、  
内侍のかんの君

ゆくすゑをふみしる人のこゝろよりもとのみちをもおもひとりぬる

#### 【二類本】

何せんにその八はしをもとむへきいつれもひとつた、心なり

いつくよりむまれおはしていつくに御かへり候へきとそれをたにまつよく御らんしめされ候は、やすく御さ候へしいつれのしうも道はた、ひとつにて候くらき夜にも三千世界を見るにまなこにては見す候た、いまの御くらゐにてましまし候とも此むねをたに御心かけ候は、べつに一大事と申事はあるましく候積尊も位よりの御さとりこそつゐにと、き申て候へとそ申あけさせ給ひけるとそ

## 六帖の終

源氏六十帖之内五拾四帖世間に入るふす此六帖は源氏かくれ給ふ事ともあり其上此奥書(マヤ)をこめたる巻くとなるによつて禁中にも源氏秘事したまふ故に世人是を不知者也奥

〔内侍のかんの君〕と云人當代禁中一の哥（ヤ）のみたりにしへの

小町といふとも是にはしかしとそきこえししかあるにより此巻くに至るまでことくゆるし給ふとそか、りける所に不遍（マヤ）左近の災あり天文初の比ほ肥前高來郡になかされ給ふ都御出の時此巻ひそかに身にたつさへもちくんだり給ふを返く懇望をつくし書レ焉者也後覽の人は是をおもひすへし可秘々々

八橋巻、帝となった匂宮は、悟りへと至る道について上人に尋ねる。上人の返答が右の波線部である。諸宗いづれであっても、また在位のままでも、悟りは得られると論ず、という点では諸本共通するが、具体的な本文は、広大本・二類本がほぼ同文であるのに対し、一類本は大きく異なっている。ところが、広大本の最末尾には、一類本によく似た和歌が存在するのである。最終詠の直前に「となん」という結びの表現があることから、八橋巻そのものは上人の返答で閉じられたと見てよい。広大本は和歌のみが最後に書き付けられた体をとっており、誰による詠歌であるかは明らかでない。これに対し一類本は、四角囲みを付したように、これは「内侍の督の君（尚侍）」による詠歌であるとする。とはいえ、この人物はここが初出で、

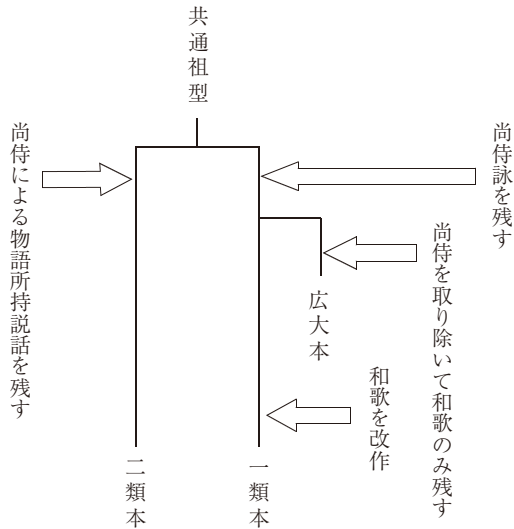
物語全体を通して独立した存在であり、なぜこのような人物がここで歌を詠むのか、やはりよくわからない。これに続いて、この物語が紫式部によって石山寺におさめられ、さらに清水寺へと奉納されたことを語る奥書を有するが、尚侍詠とは切り離して考えるべきであろう。

このような広大本・二類本における最末尾の詠歌を理解するには、先に拙稿で述べたとおり、二類本が鍵となつてこよう。二類本は、八橋巻を「とぞ」と結んだ後、最末尾の詠歌を持たないかわりに、この物語が禁中から外部へと持ち出された事情を語る。そして、禁中でも秘されていたこの物語を許され、後に肥前へと持ち出した人物こそ、「内侍の督の君（尚侍）」だと明記されているのである。本文異同が大きいとはいえ同一の物語、それも同じく物語が閉じられた直後に、物語内容とは無関係の「内侍の督の君（尚侍）」が登場するとなると、偶然の一致とは考えがたい。おそらくは、帝からこの物語を許された尚侍という二類本のような設定のもと、物語所持者たるこの尚侍が、物語読了の感慨あるいは後にこれを繙く人への言を詠んだという体で置かれたのが、広大本・一類本の最末尾詠だったのであろう。一類本・二類本ともに「ないしのかみ」ではなく「ないしのかんのきみ」という呼称で共通していることも、その証左のひとつとなりえようか。

このような尚侍の存在を勘案すると、物語末尾については、二類

本から広大本のような本文が派生し、さらにそこから一類本が派生したとは考えにくい。もちろん、二類本の尚侍による物語所持説話が原型で、そこに和歌が付加され、その後さらに広大本・一類本の祖本段階で説話部分が削除された可能性もありえないものではないが、原型（二類本）の説話部分のみが綺麗に取り除かれたというのは、いささか都合の良すぎる想定であるように思われる。

やはり、前稿で述べたとおり、かつては尚侍による物語所持説話と詠歌とが八橋巻に続いて記されていたものと見ておきたい。伝本派生の過程において、広大本・一類本は詠歌のみが残り、二類本は尚侍による所持という逸話のみが残ったという推定である。広大本に「内侍の督の君（尚侍）」の名が見えないのは、物語本文とは無関係な尚侍の登場が唐突であるために取り除かれたものと解しておきたい。広大本と一類本で歌句に異同はあるが、先述のとおり一類本は全体的に和歌を大きく改作したものと推定されることを勘案すると、この最末尾詠について、基本的には広大本の歌句が本来の形であり、一類本は手を加えたものである可能性が高い。このような推定を仮に図示すれば、次のようになろう。なお、この図における線の長短は共通祖型からの改変の高さとは何ら関係がない。



このような物語末尾のありようと、広大本が伝本二種の中間的本文を有するという実態とを勘案すると、問題は、広大本と二類本のいずれがより共通祖型に近い本文を残しているかというところになってこよう。しかし、右の想定図からも明らかなおとおり、『雲隠六帖』には複数回にわたる加筆・改変があると思われる。これらを直線的な派生過程を前提として理解しようと努めるよりは、広大本・一類本・二類本それぞれの本文のありようを場面ごとに丁寧に分

し、その作品世界を解説していくほうが物語の実態には即してよい。

なお、右の図において広大本と一類本を直接的に結ばなかったのは尚侍の有無という相違によるが、物語本文においても広大本には独自の誤写誤脱が少なくない。

かくて正月の比おきてなとれいよりもこまかにのたまひ置てければ（雲隠・五四二頁）

#### 【一類本】

かくてむ月の御こゝろおきてなと例よりもいとこまやかにのたまひをきてければ

#### 【二類本】

かくて正月の御心をきてなとれいよりもいとこまかにのたまひをきてければ

『源氏物語』幻卷末を承け、新年の準備を例年以上に細やかに差配した光源氏の姿から『雲隠六帖』は始まる。傍線部、新たな年に向けての「御心おきて」とする一類本・二類本に対し、広大本は「比おきて」とする。おそらくは「御こゝろ」とあったものを転写の過程で「御」と「ゝ」を誤脱して「こゝろ」となり、さらにそれを「比」と漢字表記したものであろう。

みすの内におましこそいて入奉る 昔物語 事や有けん御心の

内はしらすかし（桜人・六〇〇頁）

#### 【一類本】

みすのうちににおましよそひて入たてまつり給ふ むかしものかたり  
さぐやかに聞え給ふかたみにあさくはあらぬ御なからひなりしかはしたには思ひかよはし給ふことやおはしけん御こゝろのうちともはしらずかし

#### 【二類本】

みすのうちに御ましよそひて入たてまつる むかし物語 などいとこまかにきこえ給ふかたみにあさからぬ御なからひなからしたにはおもひむすほれたまふ事やありけん御心のうちどもしらすかし

桜人巻、勾宮と宇治中の君は、薫と対面する。「昔物語」を交わすその心中を、知るよしもないと語り手は言うのであるが、広大本の形では文意が通らない。一類本・二類本ではば共通する傍線部を誤脱したものと見るべきであらう。

二例を挙げるに留めたが、桜人の巻名を「僧人」とするなど、同様の箇所は少なくない。加えて、第三節で触れたような傍書の本行化が複数存することから見ても、広大本の書写態度には難があり、広大本あるいはその派生本から一類本が生じたとは考えられない。

#### おわりに

広大本には瑕疵が多く、広大本のみで物語を読み解いていくこと

は難しいと言わざるを得ない。しかし、管見の範囲では、伝本二種の中間的本文を有する唯一の伝本であり、きわめて貴重な一本と言える。今後は、広大本を基軸として場面や表現ごとに一類本・二類本の位置を探り、広大本・一類本・二類本がそれぞれいかなる物語世界を形成しているかを読解・味読していくことが求められよう。

先述のように、広大本の特徴のひとつは、『達磨記』『あかはたか』と合写されているという点である。本稿では、紙幅の都合上の点に対する検討をなしえなかったため、ごく簡単に見通しを述べておきたい。『達磨記』は中国の禅宗の始祖・達磨とそれに関わる道歌を多く収めたもの、『あかはたか』は臨済宗の僧・一休宗純に仮託された道歌を収めたものである。広大本はこの二作品に挟み込まれる形で『雲隠六帖』が書写されており、この物語が禅宗と深くかわる形で享受されていたことがうかがえる。また、『達磨記』『あかはたか』ともに道歌を多く収載している点は、『雲隠六帖』における和歌の生成を考えていく上で示唆に富む。これら二作品を視野に入れた考察は別稿に譲りたい。

本稿で検討してきた本文のありようと、右のような合写された二作品の様相とを鑑みると、広大本は、『雲隠六帖』の生成と本文派生、さらには享受の実態を解明していく上で大きな手掛かりとなる貴重な伝本だといえよう。

## 注

- (1) 本位田重美氏「雲隠六帖」『日本古典文学大辞典』第二巻 一九八四年、岩波書店
- (2) 吉田幸一氏「雲かくれ六帖」小考」『源氏雲隠巻』一九九〇年、古典文庫、中野幸一氏「源氏宮鑑抄・雲がくれ、源氏雲隠抄」解題（九曜文庫蔵源氏物語享受資料影印叢書）9 二〇〇九年、勉誠出版。
- (3) 山岸徳平・今井源衛氏「雲隠六帖」解題」（宮内庁書陵部蔵青表紙本源氏物語）『山路の露・雲隠六帖』一九七〇年、新典社
- (4) 拙著『源氏物語』享受史の研究 付『山路の露』『雲隠六帖』校本』第二章第一節（二〇〇九年、笠間書院）
- (5) 国文学研究資料館「国書データベース」に拠る(DOI:10.20730/10029760)。
- (6) 一類本・二類本の引用は前掲注(4) 拙著所収校本に拠り、広大本の引用末尾に巻名および校本の該当頁数を併記する。なお、いずれも傍線等の記号は私に付したものである。
- (7) 広大本は「ふんみやうなりし」とするが、それでは藤壺（＝宇治中の君が紫の上に似ている）と思っていたけれどもという逆接と繋がらない。「ふんみやうならさりし」と打消の語を伴う二類本のような本文を写し誤ったのであろう。広大本の誤写誤脱については後述する。
- (8) 前掲注(4) 拙著第二章第三節
- (9) 「おはせしかば」は「ま」の誤脱であろう。同じく二類本の早稲田大学図書館玉晃文庫本は「おはせましかは」とする。
- (10) 前掲注(4) 拙著第二章第三節
- (11) ここで「これも不審」とするのは、他にも本文に対し疑義の念を抱いている箇所があるためであろう。「む月朔日なれ共」本のまま、かく世のおやのうせ給へは天地もうちかへす斗にて（雲隠・五四九頁）、「せいわの古しへも一の御子はせうと」本のま、にておはせしかとも（奥守・

五八六頁）等、本来は傍書されていたであろうママ注記が本行化した例が複数見受けられる。

(12) 広大本の、よ、な、と曖昧な記述をしたのは、後述するとおり広大本には独自の誤写誤脱が少なからず存しており、広大本から一類本が直接に派生したとは考えられないためである。

(13) ただし、広大本・二類本の和歌が原型そのものの形であるかどうかは明らかでない。広大本・二類本に至る過程においても改変がなされ、そこから一類本の派生段階でさらなる改変が行われた可能性も考えられる。

(14) 前掲注(4) 拙著第二章第一節

#### 〔付記〕

広島大学在学中より今日まで終始あたたかな御指導を賜っており、妹尾好信先生の御学恩に心より感謝申し上げます。

本稿は、古典研究会（二〇二二年二月二五日、広島大学）における口頭発表に基づきます。席上、貴重な御教示を賜りました方々に御礼申し上げます。なお、本研究は JSPS 科研費 21K00281 の助成を受けたものです。

— おがわ・ようこ、広島大学大学院人間社会科学研究科・准教授 —